

4-8		主題	「ようこそ!絵画療法へ」 ～あなたが主人公～	
絵画療法		副題	「誰でも子供の頃より絵を描いたよネ。」 伝えたい、生きる力と喜びを!!	
あなたが主人公				
研究期間	16ヶ月	事業所	社会福祉法人 至誠学舎東京 緑寿園ケアセンター	
発表者：武井 摩有子・関 美和子			アドバイザー：絵画療法講師 岩瀬 静	
共同研究者：須藤 演子・明田 正栄・工藤 智恵美				
電話	042-462-1206	メール		
FAX	042-462-1737	URL		

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	緑寿園ケアセンターは、昭和50年に全国で初めての4市（武蔵野・小金井・田無・保谷）地域ケアセンターとして開設された伝統のある施設である。緑寿園は、特別養護老人ホーム・地域包括支援センター併設で、通所介護が定員40名、認知症対応通所介護が定員24名、居宅介護支援・訪問介護を展開している。通所介護では、音楽体操・リハビリ体操・陶芸・絵画・手芸・書道・ゲーム・創作・カラオケ・マッサージ・リハビリ・入浴の活動を本人に選択していただいて楽しんでいる。また、開設当初から多くのボランティアの方々に活動していただいております。地域とともにある施設である。
------------------------------	---

《研究前の状況と課題》 緑寿園ケアセンターでは、昭和55年より絵画療法を一つの活動として位置付けてきた。それぞれ心身状態の異なる方々、例えば認知症の方、片麻痺の方、高次脳機能障害の方などが、絵を描くことを通してご自分の持っている力に光を当て、その能力を絵を通して伸ばしていただくことを目的に活動している。完成した作品は、年に一度の文化祭で展示されるほか、園内の常設画廊には、常に百数十点の作品が飾られていることで、利用者ご自身やご家族、他の利用者、職員、ボランティア、地域の方々等、緑寿園を訪れるの方々の目に触れ、好評を得ている。 個々の作品に込められたご自身の思いや取り組みの様子に目を向け、ご家族や関係する職員・ケアマネジャー等が、本人の内面的な状況を理解し、そしてどのように共有していくか、が課題であった。	《研究の目標と期待する成果》 目標： ○本人が、絵を描く活動を通して、本人の持っている能力に気づき、自己表現・自信・充実感・達成感を持つ事ができる。 ○出来上がった作品を通して、本人の持っている能力に気づき、家族との関係をより深める事ができる。 ○職員やケアマネジャー等が、本人の絵画への取り組みや作品を通して、本人の内面的な状況や変化をとらえ、共有することで、日常の介護に活かしていくことができる。 期待する成果： ○絵を描くこと・描いた絵が周囲から認められることを通して自信を持ってもらうことで、自分の存在価値、他人から認められる喜びを、絵画の場面だけでなく、日常生活に拡大し、生きる力を獲得していく。 ○介護・支援が「必要な人」として捉えるのではなく、絵画作品を介してその人の持っている内なる能力に気づき、本人が持っている良い面・可能性に目を向け、親として、夫婦として「一人の人間」としての尊厳を再認識し、良好で対等な関係性を持つ事が出来る。
---	--

《具体的な取り組みの内容》

○一人一人、描くものも描き方もそれぞれである。それに寄り添うように支援し、できることはやっていただきながら、本人の思いを大切にしていける。できない部分は、ポイントを助言しながら、できるだけ本人の持っている力を引き出すようにしていく。

○本人の作品や取り組みの良い点を、ポイントをはっきりさせてほめ、全体で紹介することで、利用者や職員などがお互いに認め合うことができるようにしていく。その中で、本人は表現する喜びや充実感・達成感を味わう事が出来る。その感動の共有体験を積み重ねることで、緑寿園の風土ができていく。

○絵画の作品の変化を追ひ、描きあがった絵に対して絵画療法講師からのコメント、取り組み始めた日と終了した日を記入した用紙を一緒につけて家族に返し、家族のコメントをケアマネジャーや職員を通して聞き取りしていく。その結果は、家族から情報を確認したり、サービス担当者会などを通して把握したりする。

○得られた様々な情報を蓄積し、内部でケース検討会等を行い、本人の絵画活動での様子や内面の変化を共有し、今後の介護に生かしていく。

○利用者を抽出し、絵の変容や家族の関係の変化を追っていく。

K様の例

以前は、家庭で怒りっぽく、食卓をひっくり返したり、奥様に手を上げたりしていた。絵画に取り組み、講師や職員、他の利用者に認められることで情緒が安定してきた。また、作品を持ち帰ることで、奥様やお子様の見る目が変わり、夫婦関係も改善された。

《取り組みの結果と評価》

利用者は、絵を描くことを通して自己表現・自信・充実感・達成感を味わい、生きる力を獲得することができた。また、絵画を描く中で、活動中の仲間の生きざまを見て、他人を認めることができた。そして、家族も認め受け入れることができた。家族は活動の内容を知ることで、介護・支援が必要な人として捉えるのではなく、絵を介してその人の持っている内なる能力に気づき、本人が持っている良い面・可能性に目を向け、一人の人間として、親として、夫婦としての尊厳を再認識し、良好で対等な関係性を持つことができた。

このことによって、家族や関係職員、ケアマネジャーは利用者の理解を深めることができ、日々のケアに生かし、より尊厳を大切にしたい支援をすることができた。

また、このことは、繰り返し継続していくことが大切であるとわかった。

アンケート結果によっても、利用者は絵を描くことで、充実感や達成感を感じ、さらに新たな課題や目標を探しながら作品に取り組んでいることがわかった。

今後、職員間だけでなく、ご家族をはじめボランティア、地域の方々にもこの「生きる力・喜び」を伝えていくことで、より大きな輪の中で「あなたが主人公」の介護を実践していくことが必要であると感じた。

《提案と発信》

子供の時のように無垢な気持ちで、きれいに、上手に描くということではなく、本人の力で、感じたことを描くことにより、本人の持っている能力や自信を引き出すことができる。それが大きな輪となり周囲に感動を呼び起こす。私たちは今後もより一人一人に目を向け「あなたが主人公」の介護に取り組んでいく。

【メモ欄】